

イヨンノッカ(子守唄):レホッネ シンタ(60のゆりかご)解説

(1) 子守唄というジャンル

赤ん坊を寝かしつけるための歌、つまり「子守唄」である。名称は地域によって異なり、イフンケ(近文・帯広、樺太など)、イウンケ(荻伏・春採など)、ユンケ(美幌・樺太の真岡など)、イヌムケ(フブシナイ)、イヌンケ(釧路など)などさまざまである。子守唄は必ずしも歌詞やメロディーが固定されているものではないが、個人や地域によって「曲」と呼べるものも確かにある。

(2) 本作品について

平取町荷負ペナコリの川上まつ子氏(1912～1988)の子守唄である。なかなか寝付かずに泣いている子供に、語りきかせるというスタイルで進行する。空の上にあるという神々の住む世界が幻想的に描かれ、ラマッカラカムイ(命をつくる神)という不思議な神が登場し、この神があやしている赤ん坊たち(おそらくこれから生まれてくる赤ん坊の命)の泣き声が空から降ってくると人々が眠りにつくという。川上まつ子氏によれば、この歌は黒川てしめ氏(荷負本村1895～1973)が伝承していたもので、萱野茂氏が録音したテープを聞いて覚えたという。結末が「～と歌うのだそうだ」という伝聞調になっているのはそのためだろう。

(3) 原資料・本作収録録音について

原資料は川上まつ子氏が1984年から87年にかけて、アイヌ民族博物館に滞在し聞き取り調査に協力した際に口演されたもので、収録年月日は1987年11月10日である。本作に収録した録音は、川上容子氏(Team Nikaop)の口演による。

(4) アニメ化にあたって

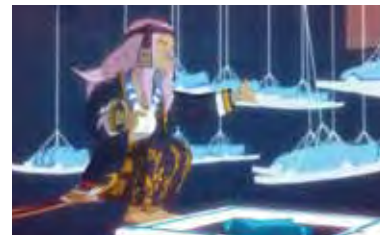
「子守唄の内容をアニメ化する」というのは実験的な試みである。しかも本作品には「板の小屋」や「60のゆりかご」という幻想的なものが登場する。「板の小屋」の全体および壁面の嵐と太陽のデザインにあたっては、かつてのアイヌがある程度情報を得ていたと思われる、アムール地方の諸民族の文化を参考にした。

冒頭部の視点が幾層にもなった天をつきぬけて上昇していく場面では、層状の天という伝統的概念を、上下左右対称にアレンジした伝統刺繍文様で象徴的に表している。実際のアイヌ伝統刺繍文様は左右対称の構成であり、上下左右が対象になることはほとんどない。

川を赤い星がさかのぼっていくのも、木々が平板にデザイン化されているのも、川面に伝統文様を思わせる線が描かれているのも、口承文芸中の伝統的なモチーフではなくオリジナルな描写である。

いっぽう、あまりに幻想的になりすぎないように、女性およびラマッカラカムイの容姿や衣装のデザインにあたってはあえて伝統文化を重視した。あくまでこの子守唄が成立した時代を想定したものである。

なお、アイヌ口承文芸には本来タイトルはない。本作品のタイトルは編集委員が便宜的につけたものであり、他2編も同様である。



オイナ(神謡):エトウチケレ サケカラ(ハンキリキリ) (ハツカネズミが酒をつくった(ハンキリキリ))解説

(1) 神謡というジャンル

ところどころに「サケヘ」と呼ばれるリフレインを伴って歌われる。地域によってオイナ、カムイユカラなどいくつかの呼称がある。さまざまなカムイ(神、特に動物神)同士の間に起きた出来事を内容とするものが多い。地域によりオキクルミあるいはサマユンクルなどと呼ばれる、いわゆる「人文神」「英雄神」が登場するものもある。十数分程度のものが多い。リズムを整えるためにアトムテイク(飾った言葉)と呼ばれる特殊な文体で歌われる。

(2) 本作品について

帯広市伏古にくらした三浦ノブ氏(1893~1973)の神謡である。エトウチケレ(ハツカネズミ。トガリネズミとする地域もある)が酒をつくり、鳥たちを招待して宴会を行う。その席でカケスがドングリを酒に入れて喝采を浴び、真似をして糞を入れたカラスが殺されてしまう、という本神謡はかなり人気があったらしく、各地にいくつかの類話が記録されている。最後に登場するシギは本来なら仲裁する役割だが、ある類話では「私が刀を伸ばしながら仲裁すればすぐに喧嘩は収まるだろうか」と語る。おそらくシギの長いくちばしが刀に見立てられているのであろう。本神謡のサケヘ「ハンキリキリ」はおそらくハツカネズミの鳴き声、「チピヤク」はオオジシギの鳴き声を表していると思われる。

(3) 原資料の紹介

三浦ノブ氏が斉藤米太郎氏・斉藤明氏のアイヌ音楽調査に協力した際に口演されたもので、収録年月日は1967年8月14日である。同録音は斉藤明氏によって帯広市図書館に寄贈された。三浦ノブ氏のご遺族の希望と収録者の承諾が得られたことにより、本作については三浦ノブ氏の録音と新たに語った録音の両方を収録した。新録音は三上真沙美氏の口演による。

(4) アニメ化にあたって

「アイヌの伝統的世界観」としては「動物たちは自分たちの村では人間の姿で暮らしている」「人間世界を訪問するときのみ動物の姿になる」とよくいわれる。基本的にはその通りだが、必ずしも全ての口承文学資料がそうになっているわけではない。今回の神謡にはいくつかの類話が存在するが、それらの中には明らかに動物の姿として語られているものがある。今回の三浦ノブ氏の語りでもカケスは「ドングリをくわえて入ってくる」のであって「持って入ってくる」のではない。少なくとも今回の神謡とその類話においては動物の姿を思い浮かべるのが妥当なのではなかろうか。そこで今回のアニメ化にあたっては全編を通して動物の姿で描くことにした。

「飲酒」は儀礼の重要な要素である。ではこの話においてはどうか。カムイが酒を飲むときはどのようにするのか。また、儀礼以外では絶対に飲まなかったのか。この話ではどのように飲んでいるのか。今回のアニメ化にあたっては儀礼としての描写がない以上、儀礼として描かないことにした。当然トゥッキ(さかづき)の台も用いていない。

この話の結末は「カラスが殺されてしまう」というものである。考え方によっては残酷だが、アイヌ口承文学に「生と死」はつきものともいえる。神謡に限らずグリム昔話など世界中の「昔話」的な伝承に同じことがいえるが、「極端な描写」こそがこれらの話の真髄である。この価値を損なうことを恐れ、今回のアニメ化にあたって結末に変更はあえて加えなかった。



ユカラ(叙事詩):ポイヤウンペ ルロアイカムイ コトゥミコロ (ポイヤウンペとルロアイカムイの戦い) 解説

(1) 叙事詩というジャンル

地域によって、あるいは内容によってユカラ、サコロベ、ハウキなどいくつかの呼び名がある長編の歌物語。神謡と異なり、リフレインなしで歌われる。ポイヤウンペ(「幼い・本島の・者」の意)あるいはオタストウンクル(「浜の・ふもとの・者」の意)という少年英雄の数々の冒険、ヒロインとの結婚を内容とする。ヒロイン側からの視点で語られるものもある。

口語で語られる散文物語とは異なり、アトムテイタク(飾った言葉)と呼ばれる特殊な韻文文体で語られる。歌い手ごとに固有の節回し(メロディーやリズム)にのせて歌われる。聞き手はレフニという棒で囲炉裏縁を叩いてリズムをとり、必要に応じてヘツチェ(合の手)を入れる。数時間におよぶ長大なものも珍しくない。

(2) 本作品について

旭川の砂澤クラ氏が歌志内の砂沢智一郎氏から聞いて伝承していたユカラであり、少年英雄ポイヤウンペ(ポイヤウンベ)と強大な敵ルロアイカムイの戦いを内容とする。冒頭部が省略されており描写もさほど細くないため比較的短い。それでも30分をこえるのでクライマックス部分のみを抜き出した。

(3) 原資料と本録音について

砂澤クラ氏(1897～1990)の「ポイヤウンペとルロアイカムイの戦い」には複数の録音があるが、今回依拠したのは1973年に録音されたもので、北海道立図書館に所蔵されている音源を使用した。今回の録音は川村久恵氏の口演による。

(4) アニメ化にあたって

ポイヤウンペたちが身につけているハヨクベ(よろい)は民具として残されているものとは異なるようである。叙事詩の多くでは主人公たちはカネポンカサ(金属製の小さな帽子)を被っているが、形状の検討が困難であり、今回の語りでは描写されていないため省略した。

叙事詩の登場人物は外来品であるコソソテ(小袖)を着ているが、他の作品ではアイヌ文様が施されていることがあるので、今回のデザインにもアイヌ文様を加えた。ポイヤウンペは金色、ホロケウカムイは銀色というのが定番の色である。

ルロアイカムイの姿は「人間でない」という以外よく分からない。ある資料によれば、小山のような身体で手足がついており綱で刀を下けている、という。だが今回の語りでは刀で戦っているようには思えないため、竜のようなイメージでデザインした。

(5) 「タクネノイエ(あらすじ)」版について

全体のストーリーを凝縮し本格アニメに再構成したものである。原録音とは文章が異なっている。脚本はまず日本語で書かれたのちにアイヌ語訳されたものである。「分かりやすく、面白くアイヌ口承文学の世界を学べるように」という方針で制作されている。そのため、台詞も基本的に口語体である。だが一部に原文の韻文を活かしてある。

冒頭部のホロケウカムイとの戦いは、原作ではかんたんにふれられるだけだが、ストーリー上重要な要素なので映像化して挿入した。原作ではホロケウカムイは4人きょうだいである。その人間関係にはさまざまな可能性があるため、本来は変更すべきではないが、混乱を避けるため2人兄妹に変更した。

登場人物のキャラクターデザインは、本叙事詩が語られていた当時の実際の文化・人物像を反映したリアリズムではなく「当時も今もファンタジーとして通用するデザイン」という方針によった。

